ふるさと再発見シリーズ6

白老のアイヌ伝承

ーアイヌ民族と和人の関わりー

白老女夷ピリカノ圖

仙台藩白老元陣屋資料館蔵

はじめに

シラオイのアイヌ民族は、北海道の他の地域に比べ、昔から和人との“共生の歴史”があったと言われています。

それは、請負人の野口屋又蔵が白老場所で産業を興し、また、元陣屋を築いた仙台藩もアイヌ民族を貴重な労働力として雇用して、その対価が支払われていたとコタンの古老たちが伝えていたからです。実際、それが労働に見合っていたかどうかは不明ですが、彼らが警衛地の治安維持を完遂するための方策として、地元のアイヌ民族との融和や共生関係の構築を図っていた可能性も考えられます。

しかし、明治以降、本州から北海道に多くの開拓者がやってきたことによって、時代や環境に急激な変化が起り、全道的な“本土化”が進められ、アイヌ民族独自の風習や習慣が薄れていきました。

明治45(1912)年に白老村の郵便局長として赴任した満岡伸一（みつおかしんいち）は、当時の白老アイヌの古老達から聞き取りを行い、古来からの彼らの風俗・風習をまとめた『アイヌの足跡』（大正13(1924)年）を刊行しました。

本書では、この書籍『アイヌの足跡-第9版増補版-』（平成15(2003)年 財団法人アイヌ民族博物館編）及び元白老町教育委員会社会教育主事の松木覚が仙台陣屋について著した『北に生きる武士団』（昭和53(1978)年）から、主に江戸時代後期における白老アイヌと和人との関わりについての伝承を抜粋してまとめました。

白老アイヌと和人の足跡が、コタンの伝承となって根付いていた事実に触れていただければ幸いです。

◆目　次◆

1　白老アイヌと関わりのある人物・出来事 ・・・1

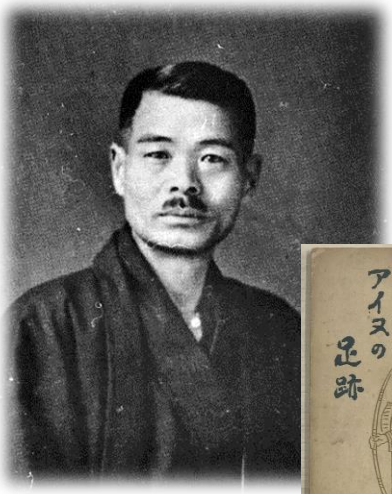
2　白老アイヌの起源についての伝承 ・・・・・・2
(1) 白老のアイヌの沿革
(2) エカシテバ翁とシタッピリレ君

3　白老コタンコロクルの歴史 ・・・・・・・・・・・4

4　江戸時代の伝承 ・・・・・・・・・・・・・・・・5
侠夷クンネの伝承

5　仙台陣屋、白老会所に関わる伝承 ・・・・・・6
(1) ウムサ
(2) ポロトの鹿狩り
(3) 悲哀の歌（叙情歌シノッチャ）
(4) 新年の祝儀
(5) 会所の伝承
(6) 陣屋の伝承

6　白老アイヌと和人年表 ・・・・・・・・・・・・12



満岡　伸一
（著書より複写）

1　白老アイヌと関わりのある人物・出来事

満岡伸一

明治15(1882)年佐賀県生まれ。45(1912)年白老村郵便局長として赴任し、業務の傍らアイヌ民族の風習・伝承の記録化に取組む。昭和25(1950)年没。

白老アイヌの風俗などを独自に記録し、大正13(1924)年10月『アイヌの足跡』を刊行。妻は歌人の満岡照子。

場所請負人(漁場請負人)

松前藩や幕府に運上金を納めて、蝦夷地の交易地（「場所」（漁業場））の経営権を手に入れた商人のこと。和人とアイヌ民族との交易や区域内のアイヌ民族の管理、仕事への派遣、他の漁場との連絡等を行った。

場所請負人の交易所を「会所」といい、白老会所は、現在の終末処理場付近（高砂町４丁目）にあった。

白老場所

おおよそアヨロ(虎杖浜)からタルマイ(苫小牧市樽前）の漁場区域。アヨロだけ松前藩が管理していた。

寛政年間（1789年～1800年）以降、幕府と松前藩との間でしばしば管轄の移動があったが、安政２(1855)年に幕府の直轄となり、仙台藩の守備範囲となった。

野口屋又蔵(野口屋は、屋号)

野口屋は、江戸時代後期から明治初頭にかけて、四代にわたり白老場所の請負人として活動した。初代は陸奥国（現青森県）出身。侠気に富んだ人で施設経営も良く、アイヌ民族との大きなトラブルもなかったらしい。

二代目又蔵は、アヨロでの昆布の養殖等に手腕を奮い、三代目又蔵は仙台藩が白老陣屋を撤退する時に大きな働きをみせた。四代目又蔵は白老郡の初代戸長や郵便局長など要職を歴任し、新しい時代の白老の建設の中心となった。

仙台藩白老元陣屋

ロシアなど西欧列強諸国の侵攻を警戒した幕府から蝦夷地警衛を命じられた仙台藩が、安政３(1856)年に白老に造営した陣屋。

仙台藩は国後・択捉までの東蝦夷地を担当し、その本拠地を白老とした。広さは約66,000㎡あり、建設には多くのアイヌ民族も携わった。

明治天皇　北海道巡幸

明治14(1881)年８月30日から９月７日まで、明治天皇が北海道内の情勢視察のため、小樽・札幌・室蘭・函館などを視察した。９月３日に白老（白老駅逓、大沢周次郎宅）に宿泊し、アイヌによるイオマンテ（熊送りの儀式）やリムセ（踊り）を鑑賞した。

これは、白老アイヌが自分たちの生活文化の一部を演じて見せた端緒とされる。

2 白老アイヌの起源についての伝承

(1) 白老のアイヌの沿革

満岡伸一『アイヌの足跡』[第９版増補版]219 頁より

現在の白老アイヌは、祖先イペニックルが日高アッペッより移住したのに始まると言い伝えられています。

移住の動機は、部落と部落の戦いに負けた酋長*が、少数の部下を連れてひとまず白老に落ち着き、仙台陣屋の北側を砦に選び、追撃軍に備えました。

同じくこの戦いに負けて酋長*を失った残りの部下は、血路を開いて逃げ、数十日後に同じ白老付近に来ました。しかし、すでに別の軍が砦で警戒していると聞き、自分達の陣地とするために砦を攻めました。

戦いの途中で、互いに射合う矢の印で味方同士であることが分かり、一緒に準備をして敵を待ったが来ません。

そのまま、仙台陣屋の付近のプンガダイウシ（ハシドイの繁茂している所の意）に定住しました。

「ウトカンベツ」名が生じたのはこの戦からで、川を挟んで弓を射合ったのでこの川をウトカン・ベツ（ウトウカン・ペッ utukan-pet 弓を射合う・川）と呼ぶようになりました。

この以前から、白老には２、３戸の一族のアイヌが居住していましたが、イペニックルが交渉して宝物を提供して、完全に自分の領地にしました。

第５代パセヌエーの時代に初めて松前藩の会所が白老に出来ました。松前藩が、この沿岸を白老場所として経営するにあたって、アイヌ民族を労働力とするために、各所に居住していたアイヌ民族を集めて海岸への移転を命じました。ここで初めて白老コタンというものができ、今日のコタンの基礎をつくられました。

イペニックルが白老の開祖であり、草分けの家と伝えられています。その直系の子孫が第11代の熊坂エカシで、代々コタンコロクルとして続いています。

当時（大正10(1920)年頃）の白老コタンは、現在の高砂町の海岸近くに約90戸が一団となっていました。旧土人保護法により給与された土地で、すべて売買譲渡を禁じられているので、それぞれ個人の所有地です。生業は全村漁業で、農業としては、わずかに家庭菜園をするくらいで、中には農畜を試みる者もいましたが、専業という程度のものではありませんでした。

1890年頃の家屋は、内地風の家はわずかに２、３戸に過ぎず、ほとんどが伝統的家屋（チセ）でしたが、年々、内地風の建築が大部分を占めるようになっていました。

(2) エカシテバ翁とシタッピリレ君

満岡伸一『アイヌの足跡』[第９版増補版]222 頁より

白老コタンの第十代コタンコロクルのエカシテバ翁は、温厚謹厳な人格者で、一村の酋長*としてふさわしい貫録を持っていました。とても物知りで、自家の家系、初代以来の家長の名、人物の特長、各時代の出来事、開村以来の村の沿革など、祖先からの語り伝えとはいえ、よく記憶していました。一村の祭祀を司るだけあって、すべての故事や儀式典礼に通じ、しかも公平な人であったため、部落民も心服し、元老連中も皆一歩を譲っていました。仙台藩が駐屯していた時はまだ若かったらしいが、色々記憶をたどって著者に資料を提供してくれました。

明治14(1881)年の明治天皇巡幸の時は、熊送りの儀式に参加し、明治天皇のご尊顔を拝し奉ったときの思い出話などをよく話しており、一生の光栄として感激していました。とても酒好きで、飲めば陶然として、時にユカラ（yukar叙事詩）など唸ることがありました。晩年は失明して、70幾歳で、大病もせずに亡くなりました。

第11代のシタッピリレ君は、エカシテバの一人息子で、父の没後はやはりコタンの儀式などのときは酋長*として祭祀を司りました。少し人が良すぎるぐらいで、悪意のない無邪気な男でした。

明治初年に初めて白老に苫小牧の分校として小学校が出来、アイヌの児童７、８人が入学、そのときの最初の生徒です。自分の名の“シタッピリレ”だけは、怪しげな片仮名で書けますが、ほかのことは一切忘れたといいます。

明治14(1881)年の御巡幸の思い出話は、陛下が白老にお泊りになった翌朝（９月４日)、朝早くから白老川の渡し場の所で、真っ裸になって泳いで遊んでいたところへ、槍を持って馬に乗った兵隊が揃って来たので、びっくりしてそのまま川下の方へ逃げて草原の中に隠れ、しばらくして家へ帰ったが、ミチ（mici父）に大変叱られた、と言っていました。

＊ 本書中には今日の人権擁護の見地に照らして、不当・不適当と思われる語句や表現がありますが、作品発表時の時代的背景を考えあわせ、また、著者が故人であるという事情に鑑み、底本（原文）通りとしました。

内地

北海道の方便で本州のこと。本誌では、アイヌ民族との対比で、和人、和風、現代日本の意味でも使用。

3　白老コタンコロクルの歴史

コタンコロクルとは、コタン（村）における首長のことです。
※代替わりの年代は不明です。

第１代　イペニックル（白老アイヌの開祖）
日高アッペッより白老に来住。

第２代　セタイカウシ

第３代　メレメレケクル

第４代　ヌセッア

第５代　パセヌエー
白老浜に移転し、今日の白老コタンの基礎を作った。

第６代　アペピーロー

第７代　ニーコーウセ

第８代　イカップヌーレー

第９代　シーツキ

第10代　エカシテバ
（嘉永６(1850)年頃～大正14(1925)年頃）
仙台陣屋撤退のときは14、5歳頃。
30歳の頃、明治天皇の北海道巡幸の際に熊送りの儀式を披露した。

「熊坂」の姓をつける

第11代　シタッピリレ〔熊坂　運之丞〕
（明治６(1873)年～昭和17(1942)年）

最初の生徒になる

江戸時代

享和２(1802)年
シラオイに会所ができる。

文化年間（1804年～17年）頃
アイヌ民族に会所付近への集団移転を命じる。

安政元(1854)年
日米和親条約を締結。
幕府が箱館奉行を設置。

安政３(1856)年
仙台藩が白老に元陣屋を築く。

明治元(1868)年　戊辰戦争勃発。
仙台藩士、白老元陣屋から撤退。

明治

明治４(1871)年
戸籍法が施行。

明治 12(1879)年
白老に初めて小学校が設置される。

明治 14(1881)年９月
明治天皇が北海道を巡幸（訪問）し、白老に立ち寄る。

明治 32(1899)年
北海道旧土人保護法を公布。

明治 45(1912)年
満岡伸一、白老村郵便局長として赴任。

大正

大正 13(1924)年
『アイヌの足跡』を刊行。

昭和

4 江戸時代の伝承

俠夷クンネの伝承

満岡伸一『アイヌの足跡』［第９版増補版］230頁より

江戸幕府は、アイヌ民族の和風化を図るため、言葉や風俗一般、服装まで、内地と同様とすることや、読み書き、算盤を教え、知識の向上を図ることなどを実施させました。

ところが、アイヌ民族の反発が意外に根強く、一向に進みません。奉行所では役人を八方に派遣し、半威圧的に実施を迫りました。２、３の部落では抵抗しきれずお達し通り、従来の断髪をちょんまげに結ったり、急に内地語の稽古をしたりする者もいたらしいのですが、全島的に見るとほとんどその効果は見られませんでした。

白老でも、この騒ぎのときは部落一同相談の結果、いかにマトマイカムイ（matomay kamuy 松前殿様）、エントカムイ（ento kamuy 江戸将軍様）のお達しでも、この祖先から伝わったアイヌプリ（ainu puri アイヌの風習）だけは止めるわけには行かないということになり、絶対に内地化には応じないことが決まりました。

奉行所では、役人を派遣して数日間諭しましたが、一向にらちが明かないので、役人も業を煮やし、反対者の主立った者の中からクンネという男を引き出し、お上の命令に背くのは不届きだと、その場で斬ることにしました。

クンネは、一同を顧み、「尊いアイヌの風習を守るために、自分はその犠牲となって今死ぬが、皆の者は益々結束を堅くし、神から伝えられた尊いアイヌプリを守って、幸福に暮らしてもらいたい」と、言い終って笑って首を差し出しました。役人も、このクンネの武士にも珍しい堂々たる態度と、彼らの言う理屈にも一理あるので始末に困りました。

これまで何事によらず、お上の命令やお触れには絶対従順で、命令に背いたり、反抗的な態度を見せたことはなかった白老アイヌも、この風俗の改変だけは頑として応じません。もし力づくで内地化が実施されることになれば、全村一致して、内地人の手の届かない山奥に籠るか、または幕府直轄の地域を逃げて、比較的寛大な西海岸の松前領内に移転するほかはないと腹を決めたらしいのです。それでは白老村も廃村になってしまうので、役人も大いに手こずり、振り上げたげんこつのやり場に困ったという格好でした。ついにクンネもそのまま放免され、風俗改変のことも、なんだかよくわからないうちに立ち消えとなりました。

5 仙台陣屋、白老会所に関わる伝承

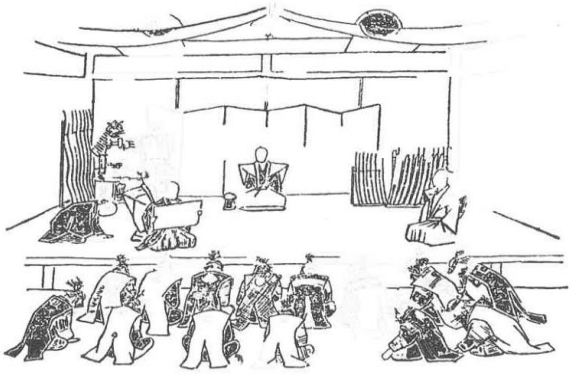
(1) ウ ム サ

満岡伸一『アイヌの足跡』［第９版増補版］181頁より

ウムサ（umusa）という言葉は、互いに親しみ合い、愛撫し合う意味で古くから使われていました。

しかし、内地人が道内で勢力を得るにしたがって、ウムサ本来の意味は忘れられ、懐柔政策を示す行事のこととなったようです。請負商人側による雇っているアイヌに対する慰労の機会として、幕府役人が執行するようになってからは、アイヌを服属させる誓約儀礼に変わっていきました。

普通はその土地の漁場請負人が行いましたが、白老のように陣屋が置かれた所では、陣屋の備頭が主催で行いました。この機会に、掟の尊重、家庭の親睦、村内の和親、家業の精励、沿岸防備に対する心得などを授け、親孝行な子や貞節な女性の表彰なども行われたそうです。



「ウムサの図」
満岡伸一『アイヌの足跡』［第９版増補版］182 頁

当時、白老で行われたウムサに直接参加した老人のお話があります。

「白老のウムサは、いつも仙台陣屋でやりました。年に一度で、季節は大体夏の頃と記憶しております。当日は会所の主人に連れられて皆揃って行きます。内地人側では会所の主人と通詞（通訳）帳場くらいで、アイヌ人側では総オッテナ（村内アイヌの総取締）と各小部落にある脇オッテナ、総小使、脇小使などで、総数12、３人、皆盛装して陣羽織を着て出掛けます。当時の白老の総オッテナはレキシノという男でした。

陣屋に行けば私共は下座の方にあぐらをかいて控えております。そのうちに幕が上がりますと正面の座敷には、鎧、兜、槍、鉄砲、刀などがたくさん飾ってありまして、殿様（陣屋の守将だろう）は裃を着て正面に座り、同じ裃を着た侍が７、８人そばに控えておりました。

我々一同アイヌの式で最敬礼を致します。すると殿様のそばに座っている侍が何か書いたものを大切そうに通詞に渡します。通詞はこれを押し頂いて広げ、アイヌ語に訳して聞かせます。その内容はまちまちで一定してはいませんが、

一、異国の船を見かけたときはすぐに陣屋に知らせること。
一、三日月の船印ある船を見かけたときはすぐに陣屋に知らせること。（三日月は不明）
一、上を敬い親を大切にし、夫婦睦まじく兄弟仲良くすること。
一、年頃になって妻を持たない者には妻を持たせること。
一、子供のない者は養子をして家を絶やさないようにすること。
一、悪病が流行したときはすぐに陣屋に知らせること。
一、喧嘩などをせずに村内皆仲良く暮らすこと。
一、互いに反目している者はよく調停して円満にすること。

大体上のようなお達しです。通詞はありがたくお受けして礼をせよ、と申しますから一同最敬礼をします。総オッテナは代表し、御申し聞かせのことは皆に伝えて堅く守ります、と通詞に向って挨拶します。」

この挨拶は初めはアイヌ語を使用していたらしいのですが、後にはこの挨拶だけの内地語を棒読みに教えられて、内地語を使用していたそうです。
白老最後のコタンコロクルであったエカテシバは、「何しろ全然内地語が分からないのに、御申し聞かせの条々堅く相守り誓って違背致しません云々、を暗唱するのになかなか骨が折れて困りました」と、このことを面白く話していました。

「通詞は改めて殿様の方に向かってこの答辞を訳して申し上げるようでした。この言い渡しが済めばあらかじめ用意してあるトゥキ（tuki 杯）に酒を注ぎ、イクパスイ（ikupasuy 捧酒箸）を添えて一人一人に渡されます。私共は一斉に杯を取り上げて、神様に向かって殿様の厚意を謝し、殿様の健康を祈り神酒を頂きます。最後にタプカラ（tapukar 男の踊る最も武張った上品な舞のようなもの）を踊ってお目に掛けます。
これで幕が下ろされ殿様は御退出になり、私共は外に出ます。外では広場にむしろを敷いて準備が出来ておりますので、今度はむしろの上に座ります。このときは全部落の老若男女皆一緒で、大変なご馳走です。酒は幾樽でも飲み放題、赤飯は食い放題で歓を尽くし、シノッチャ（sinotca 歌）、リムセ（rimuse 踊り）などをして大にぎわいで、中には酩酊して叱られ、門の外に引き出される者などもあるくらいでした。」

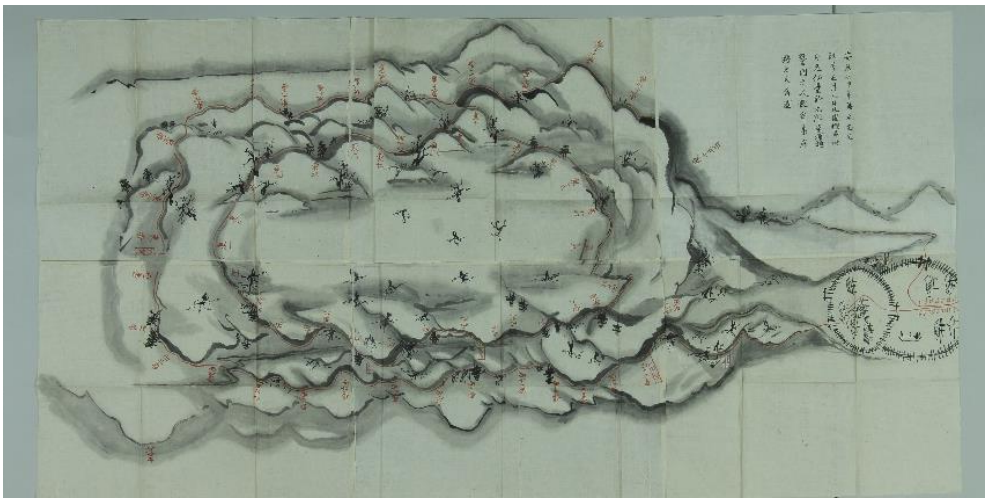
トゥキとイクパスイ

(2) ポロトの鹿狩り

満岡伸一『アイヌの足跡』［第９版増補版］184頁より

白老では、毎年一回陣屋の主催で山巻きという鹿狩りを催しました。これは仙台藩の伝統行事のひとつで、戦の無い平時でも、兵の武を練り、志気を鼓舞する催しで、また、アイヌに慰安を与える目的でもあったそうです。

これに参加した老人の追憶談によると、「何でも早春でまだ雪のたくさんある頃です。陣屋の殿様が大将となって陣屋の侍が総出で、ポロト（poroto 白老の大沼）奥の山で鹿狩りを催します。このときはコタンの者（アイヌ人）は皆出て鹿を狩り出す手伝いをします。山奥から狩り出された鹿はだんだん沼の方に逃げて来る。それを侍が火縄銃で撃ちますが、随分たくさん獲物があります。中に器用な者はアイヌでも鉄砲を拝借して撃つこともあります。このとき殿様は沼の上流の二股になっている所に幕を張り、５、６人の侍とともに幕の中におられます。狩りが済むと我々はその日の獲物を運び、殿様の前に並べてご覧に入れ、その場で皮を剥ぎ、皮は殿様に差し上げ、肉は全部アイヌに下さいます。そしてその晩は鹿の肉を肴に酒をたくさんご馳走になって帰ります。云々。」



『鹿狩之大略図』
安政７(1860)年１月　北海道博物館蔵

「安政七申年萬延元年改号正月三日北國蝦夷地白老仙臺於元陣屋浦迪警固之人数寄集鹿狩之大略圖」の書き入れがあり、東隊は巽御門から、西隊は宮川御門から出て鹿狩りを行ったことが分かる。また、白老元陣屋の北方に「此ヘン炭釜」の書き込みもある。鹿狩りは訓練を兼ねた正月の行事で、アイヌ民族も鹿の追い出しに勢子として動員された。

(3) 悲哀の歌〔叙情歌 sinotca シノッチャ〕

満岡伸一『アイヌの足跡』［第９版増補版］108頁より

「私が会所で奉公していたとき、いつも米を背負って仙台陣屋に行きました。そのとき陣屋に一人のポントノ（pon tono 若侍）がいました。ポントノは私の姿を見ればやさしい笑顔で迎えてくれました。二人はいつとはなしに相思の仲となり、陣屋の内は人目が多いので、いつもポントノが出てきて裏の岡の木陰で逢瀬を楽しんでおりました。

二人の仲が噂に上り、国の方に知らせてやった者があるらしい。私はポントノに奥さんがある事は夢にも知らなかったので、突然お国仙台からクルマッ（kurumat 和人の奥さん）が来たということを聞いて独り悲しんでおりました。

ある日また例によって米を背負って陣屋に行ったところが、いつもの窓にポントノの顔は見えないで、それはそれは美しい何ともたとえようのない、女神のような気高い女が顔を出していたので、私は驚いてただぼんやり立っておりました。するとポントノは何かの用にかこつけて出てきました。二人は寄り添って陣屋の土塁の陰に来ました。ポントノは国からクルマッが来て、監視が厳しいので当分逢われないといい、二人は手を取り合って悲しんでおりました。そこへ突然現れたのは先程窓から見えた女神のような美しい女でした。私は自分の姿を恥じるよりもその女の気高さに自然と頭が下がって、何を言うことも、聞くことも出来ませんでした。そのうちにポントノはクルマッに連れられて家に入ってしまい、一人残された私は悔しさ、悲しさでしばらく泣きましたが、たとえこの世で一緒に添われないまでも、あの世に行って必ずポントノを呼び寄せ、楽しく暮らそうと決心し、しおしおとコタンに帰りました。

それから間もなくのことであった。女は白老海辺の砂丘ではまなすの花が散るように美しい最期を遂げた。メノコの一念が通じてか、ポントノも陣屋の裏の木の陰で男らしく立派に腹を切って女の後を追った。」

(4) 新年の祝儀

満岡伸一『アイヌの足跡』［第９版増補版］184頁より

「ウムサは陣屋で年一回ありますが、そのほかに会所でイノミ（inomi）といって、元旦に新年の祝儀を下さる式があります。

ウムサと同様な順序で会所の主人が主となって通詞に申し渡し、通詞はそれをアイヌ語で一般に伝達します。伝達の内容は陣屋のお達しと似通ったものですが、ただ最後に「去年は春秋の漁も皆の骨折りで、首尾よく漁期を終わったからここにイノミの祝いをする。餅も酒もたくさんあるから皆愉快に飲んでほしい。そして今年もまた一生懸命に働いてくれるように」と言います。

お話が終われば通詞の注意で皆丁寧にアイヌ式のお辞儀をします。総オッテナは一同を代表して答辞を述べ、通詞はこれを主人に伝えます。それで式を終わり、部落の皆の者とともに餅を分配され、酒をご馳走になって帰ります。帰りには各部落の人口に応じ、白老は２樽とか社台は１樽というように樽のまま酒をもらい、帰宅してから皆が集まってまた酒宴を致します。」

(5) 会所の伝承

松木覚『北に生きる武士団』168頁より

口　承：白老アイヌの古老　田畑アキ（明治27（1894）年～昭和59（1984）年）による

「正月には会所に子ども達が集められて餅を貰ったものです。貰った子ども達は額に墨で丸印を付けられた。子ども達は餅を貰うと急いで会所の下を流れるウトカンベツ川で墨を洗い落として、素知らぬ態でまた餅を貰ったものです。

子どもが生まれると男子であれば反物半反女子であれば木綿糸白黒各１把を支給されたのです。」

白老会所の様子

⑹ 陣屋の伝承

松木覚『北に生きる武士団』169頁より
口 承：白老アイヌの古老 田畑アキ(明治 27(1894)年～昭和 59(1984)年)による

「殿様が通行の時は、頭に帽子を飾りアツシを着、レコトンベ（頸の粧飾）をつけて、サバンベ（正装）で地べたにあぐらを組みオガミ（両手をさすって拝礼）をしました。

弁財船が沖懸りすると、アイヌが小舟で荷搬びしました。おおむね３日位で荷下ろしは終りました。これは陣屋からの命令というのでお金は貰えませんでした。陣屋まで様々な荷を運ぶので疲れますが、途中で休んだ者は打ち首にされました。

土塁を越すと右側にアオダモの樹があり、ここでアイヌは仲間の中から見張をこの大木によじ登らせて、侍達の動きを偵察しておいて、木蔭で抜荷をしたという事です。

ある日酒樽を運んでいた時、ここに休み、樽に釘を刺して小孔を穿ちドングイの枝を差し込んで酒を吸っていました。アイヌ達は交互に見張番をしながら盗み飲みをしていました。その中に泥酔してしまいに発見されて打ち首になり小沼に投じられました。この大木はイツカチキサニ「盗人のアオダモ」と呼ばれるようになりました。

秋猟が終ると冬籠りに入ります。すると陣屋から御達しがあって遠くの薪山から薪を切るように命じられました。陣屋からは鉈斧を与えられました。三十間の薪を切らねばなりません。薪が出来上るまで何も支給されないので喰べるのに難儀しました。秋味等を獲って空腹を満たしたが、それが発見されると手足を縛って折檻されました。またひそかに沖漁に出た者は殺されてしまいました。」

6 白老アイヌと和人年表

アイヌ民族と和人の関わりに関する文献は、和人の記した文書に頼らざるを得ませんが、19世紀から幕末までの白老の主だった記述は以下のとおりです。

本稿では、主にアイヌ民族の名が見えるものや、家数、人口が記載されている書物のみを取り上げました。

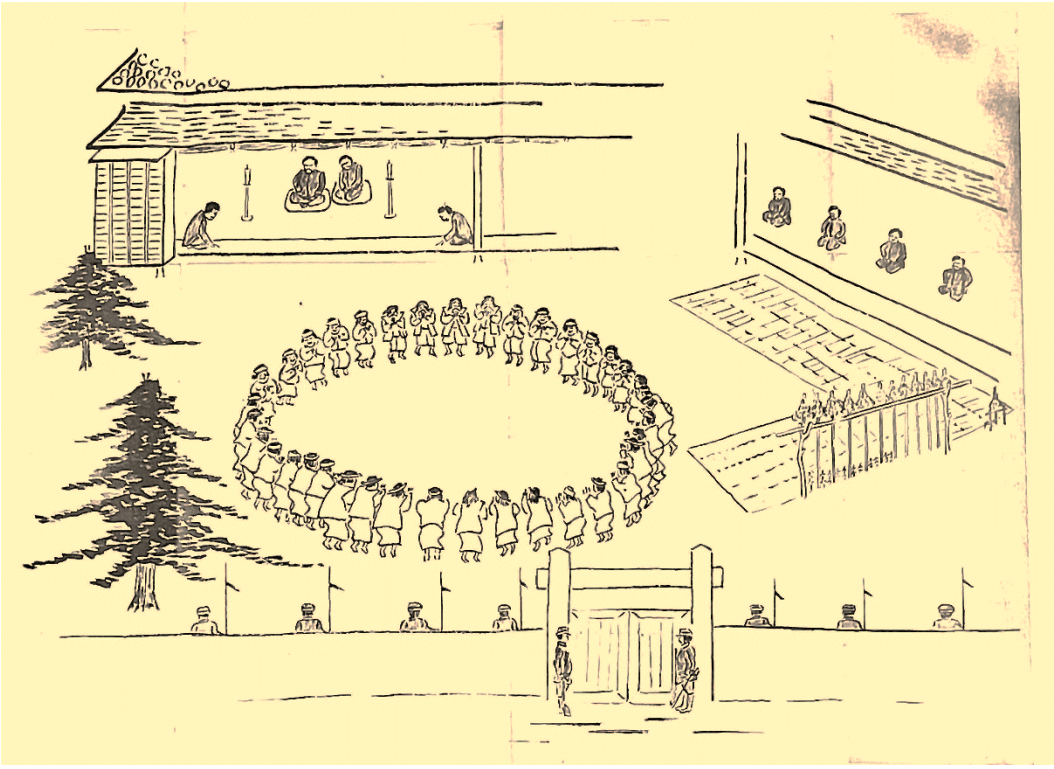
和 暦（西暦） 『出 典』	記　　述	家数・人口
文化４(1807)年 『西蝦夷地日記』 田草川伝次郎	一 夷惣人数三百四十人　シャタイ、シラオイ、シキウ、メップ、アイロ五ヵ所に住居 一 白老　惣乙名 ヲビシテヲク 脇乙名 シネネヲク 小使 イシュリカン 並乙名 五人　並小使 三人	シラオイ 340 人
文化５(1808)年 『東蝦夷地各場所様子大概書』「白老場所様子大概書」	アイロ 一 蝦夷家数、五軒、此人数十六人の内男六人女十人、内乙名一人、小使役一人 メップ 一 蝦夷家数、五軒、此人数三一人、内男二十人女十九人、乙名なし、小使役一人 シキウ 一 蝦夷家数、三十三軒、此人数百四十一人、内男六十四人女七十七人、内乙名二人、小使役一人、江友出稼 白老 一 蝦夷家数、三十軒、此人数百十三人、内男五十五人女五十八人、内乙名役三人、小使役三人 砂台 一 蝦夷家数、九軒、此人数四十八人、内男二十三人女二十五人、内乙名役二人、小使役無之、右場所前浜南を受、	アヨロ ５軒 16 人 （男６女 10） メップ ５軒 31 人 （男 20 女 19） シキウ 33 軒 141 人 （男 64 女 77） シラオイ 30 軒 130 人 （男 55 女 58） シャダイ ９軒 48 人 （男 23 女 25）
天保９(1838)年 『北陲対問』	白老場所 夷人別三頁迄三百六十人	白老場所 360 人
安政元(1854)年 『安政元年調東西蝦夷地明細書』	シラヲイ 人別　四百十五人	シラオイ 415 人

和 暦（西暦） 『出 典』	記　　述	家数・人口
安政４(1857)年 『入北記』 玉蟲左太夫	土人家人別調 シラオイ村 　土人家数三十九軒 人別二百九人 　内男百八人 女百一人 シャタイ村 　土人家数七軒 人別二十三人 　内男九人 女十四人 シキウ村 　土人家数三十八軒 人別百七十一人 　内男八十五人 女八十六人 アヨロ村 　土人家数三軒 人別十人 　内男五人 女五人 総家数八十五軒　人別四百十三人 　内男二百七人 女二百六人 役土人名前調 　惣乙名 オマナンテ事ヲノエモン 　脇乙名 イコチャンコロ事イサブロ 　惣小使 リキシツノツ事リキエモン 　並小使 イキリヤウシ事イヘ イタクヘカン事イタキツ 　　ノッコロ事ノロキツ キシタヲク事キスケ 　　リクンサル事リキツ サエコラン事サキツ 　　イモトクテ事イキツ アヘリホリ事ヤシケ 　　以上十一人	シラオイ 39 軒 209 人 (男 108 女 101) シャダイ ７軒 23 人 (男９ 女 14) シキウ 38 軒 171 人 (男 85 女 86) アヨロ ３軒 10 人 (男５ 女５) 総数 85 軒 413 人 (男 207 女 206)
安政４(1857)年 『東蝦夷日誌』 松浦武四郎	シラヲイ（白老） 　土人（文政改、七十二軒、三百三十餘人 　　安政改、八十二軒、三百九十九人）	シラオイ 文政 72 軒 330 人 安政 82 軒 399 人

参考　白老コタンにおけるアイヌの役職名

和人が、各コタンの人達につけた役職名で、村を代表して内治外交の行う役割を担っていました。

乙　　名 （ｵｯﾃﾅ）	「オトナ」と言ったらしいが、後に音が訛ってアイヌ人は「オッテナ」と呼んでいる。オッテナは理事者で、これに対してコタンコロクルは最高顧問と神官を兼ねたような観がある。
脇 乙 名	副乙名の意味で、これに対し、乙名の方を総乙名と呼んだ。例えば白老場所というのは、敷生、白老、社台、樽前の４部落を一括したもので、白老に総乙名がおり、敷生、社台、樽前にはそれぞれ脇乙名がいて、その部落を代表している。総乙名はこの４部落の総代表、総取締という格好である。
小　　使 （ｺﾂｶｲ）	場所請負人や支配人の命を伝えたり、一方、乙名の補助機関で部落の連絡役である。相当頭の良い気が利く男が選ばれ、部落内でも乙名に次ぐ権威を持っていたらしい。
脇 小 使	脇乙名と同じく、小使の副の意味である。



明治十四年九月三日夜白老行在所庭内に於ける明治天皇覧のアイヌ熊祭の圖
満岡伸一『アイヌの足跡』口絵より　大正13(1924)年

参 考 文 献

宇田川　洋『アイヌ伝承と砦』　昭和56(1981)年
高倉新一郎『アイヌ政策史』　昭和18(1943)年
高田　寅雄『白老ペン第21号』　平成12(2000)年
松木　　覚『北に生きる武士団』　昭和53(1978)年
森竹　竹市『森竹竹市遺稿集 レラコラチ』　昭和52(1977)年
満岡　伸一『アイヌの足跡』　大正13(1924)年
満岡　伸一『アイヌの足跡-第９版増補版-』　財団法人アイヌ民族博物館編
平成15(2003)年

書 籍 名 ふるさと再発見シリーズ ６
「白老のアイヌ伝承 ～アイヌ民族と和人の関わり～」
発行年月　令和４(2022)年３月
発　　行　仙台藩白老元陣屋資料館　〒059-0912北海道白老町陣屋町681
TEL＆FAX：0144-85-2666
E-mail：jinya@town.shiraoi.hokkaido.jp